

令和4年度児童館における健全育成活動等開発事業報告書（事業要旨）

1 事業の実施体制

(1) 児童健全育成活動等開発事業企画・推進会議の委員構成

No.	部局・役職等	氏名
1	大津市福祉部子ども未来局長	堀井 雪江
2	大津市立膳所児童館長	吉田 泰之
3	大津市立皇子が丘児童館児童厚生員	清水 亘
4	大津市福祉部子ども未来局子ども家庭相談室長	西 健次
5	大津市教育委員会教育支援センター次長	中島 悟
6	大津市健康保険部保健所 地域保健推進室次長	岡野 久美子
7	滋賀県児童館連絡協議会事務局員	保木 誠司
8	龍谷大学教授（大津市子ども・子育て会議会長）	土田 美世子

(2) 児童館における健全育成活動等開発事業マネージャー

No.	部局・役職等	氏名
1	大津市福祉部子ども未来局子ども・若者政策課 課長補佐	山田 浩信
2	大津市福祉部子ども未来局子ども・若者政策課 主任	徳永 幸代

2 企画・推進会議の実施状況

日程	内容
第1回 6月27日	大津市立児童館の現状及び課題の共有、今後のスケジュール
第2回 7月27日	現行の活動の充実及び新たな活動の創設についての検討
第3回 11月22日	進捗状況について（中間報告）、意見交換
第4回 2月1日	成果の検証、今後の児童館の機能拡充について

3 事業の目的、実施内容、分析及び考察

(1) 事業の目的及び実施内容

ア 発達段階等に配慮した健全育成活動

① 近隣の施設（体育館や公園等）を活用したスポーツ活動の実施

目的	子どもの発達段階に応じた活動の内容を定期的実施し、スポーツ活動では、体力増進の機会の提供のほか、体力差がある高学年と低学年がひとつの活動を通じて互いを理解し、それぞれの発達段階に応じた自主性や社会性、創造性を育む。
内容	・近隣の体育館で運動あそびの専門講師を招き、発達段階や個人の運動能力に配慮した活動を実施。 ・近隣の体育館や公園、館内のホールで主に小学生を対象としたスポーツ活動を実施。

② 乳幼児の発達段階に応じた区分による活動の実施

目的	乳幼児の発達段階に応じた区分の活動や子育てに不安を感じる保護者への支援や親子の触れ合う場の提供では、それぞれの活動を通して、子ども自身の心身の発達とともに保護
----	---

	者が子育ての楽しさや負担感の軽減につなげる。
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年間を通じて事前に登録した2歳児の親子が、子どもの発達段階に合わせた季節のクラフトあそびやごっこあそび、農作体験などを実施。また、地域の方が活動のサポート。</li> <li>・年齢や月齢での区別の活動ではなく、それぞれの子どもの運動面での発達段階に応じた区分で広場を田上児童館において実施。</li> </ul>

### ③ 子育てに不安を感じる保護者への支援や親子の触れ合う場の提供

目的	子育てに対して不安や悩みを抱える未就学児の保護者に対して、親子の触れ合いを基本として、子どもの年齢が比較的近い者同士の交流や幅広い年齢の子どもを持つ保護者同士の交流を通じて、保護者の子育ての楽しさや負担感の軽減につなげる。
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・乳幼児の保護者へ向けた支援の活動の一つとして、外部の講師を招いた子育てに関する講座や市保健師による子育て相談会を実施。</li> <li>・子育て中の保護者が児童館を拠点に、概ね10名以上の団体を結成し、相互の連帯と地域ぐるみの児童健全育成を図ることを目的に活動を実施。</li> </ul>

## イ 子どもの権利を基盤とする健全育成活動

### ① 児童の自主性を尊重したボランティア活動の支援

目的	子どもの年齢(学年)や発達の程度を考慮した上で、子どもが主体的かつ自発的に自由に意見を述べ活動に参加することができる場の提供し、活動を通じて相手を思いやる気持ちや協力することの大切さへの気づきにつなげる。
内容	・年間を通じ、事前に登録した小学3年生から6年生までの児童が同じ思いを持つ仲間とともに様々なボランティア活動に取り組む。

### ② 小学生が主体的に活動内容を選定する活動の実施

目的	子どもの年齢(学年)や発達の程度を考慮した上で、子どもが主体的かつ自発的に自由に意見を述べ活動に参加することができる場の提供し、活動を通じて相手を思いやる気持ちや協力することの大切さへの気づきにつなげる。
内容	・あそびや話し合いの中で異学年や他校生と交流する機会を提供し、子どもたちが活動に自発的に取り組めるような支援をしている。

## ウ 福祉的な課題への対応

### ① 保健部局との連携による母子保健等の相談支援体制の拡充

目的	0歳から18歳未満の子どもが対象である児童館において、様々な課題を抱える子どもの利用が増えてきている。乳幼児に向けては、子ども自身の心身の成長の機会を提供し、その保護者へは相談支援体制を拡充するために、専門分野との連携を強化し、保護者に寄り添った支援を行う。
内容	・各福祉ブロックのエリア内で、すこやか相談所と連携し、乳幼児親子を対象にした子どもの成長・発達に関する講座などを実施。

### ② 関係機関との連携による子どもの居場所づくり

目的	小学生以上に向けては、それぞれの課題に対し、学校や関係する教育機関や福祉機関と
----	---

	の連携を強化し、子どもの居場所づくりを進める。
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童館ボランティア活動と地域の子ども食堂との連携（参加型の児童館清掃活動を定期的に実施）</li> <li>・小学生を対象に夏休みの2日間、近隣小学校の教諭が子どもたちの宿題の見守りを実施。</li> <li>・教育機関との連携による子どもの居場所づくり （児童館を活用した不登校の子どもの再登校への支援等を行う大津市教育支援ルーム「ウイング」の実施）</li> </ul>

## エ 児童館の機能強化を図るための事業として認められるもの（中・高生世代の活動）

### ① 中・高生世代と乳幼児が触れ合う場の提供

目的	核家族化や少子化により中・高生世代が乳幼児に触れ合う機会が減少している中、地域の中学校や高校と連携を図りながら、読み聞かせボランティアなど中・高生世代が児童館活動を通じて乳幼児とその保護者と触れ合う機会を設ける。
内容	・核家族化や少子化により中・高生世代が乳幼児に触れ合う機会が減少する中、地域の中学校・高校と連携し、堅田児童館において、7月と12月に事業を実施した。

### ② 中・高生世代のボランティア活動の機会の提供

目的	中・高生に対して、居場所のひとつとして、まずは児童館を認識してもらい、どのようなニーズがあるか、また、どのような方法であれば、中・高生が利用しやすいかを調査し、今後の児童館の機能拡充に活用する。
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校生によるクリスマスパーティー&amp;学習会・お楽しみ会の実施。</li> <li>・高校生によるクラフト教室の実施。</li> </ul>

## (2) 事業の分析及び考察

### ア 発達段階等に配慮した健全育成活動

#### ① 近隣の施設（体育館や公園等）を活用したスポーツ活動の実施

分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動回数の増加から、小学生の利用数の増加につながり、また、児童館が所在する小学校区以外からの参加も見られた。</li> <li>・参加者の年齢構成はまちまちであったが、高学年が低学年にも楽しめるように独自のルールを考える姿が見られ、楽しみながら一緒に活動をしていた。</li> <li>・スポーツ活動に地域の住民や大学生ボランティアが参加することで、子どもが喜ぶ姿があった。また、異なる世代との交流につながった。</li> </ul>
考察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スポーツ活動は、子どもたちのニーズがあり、異なる年齢や学校との交流の場となっており、気軽に参加できることから、児童館の利用促進につながる。</li> <li>・スポーツ活動は、異なる年齢や学校の子どもたちが参加することで、楽しく一緒に遊ぶための工夫を促し、子どもたちの自主性や創造性を育む効果が期待できる。</li> <li>・スポーツ活動は、異なる世代の交流につながり、子どもたちの社会性を育むことができる。また、児童館が活動の拠点となり、地域の住民や大学生の参加を促すことで、地域の健全育成の環境づくりを推進することができる。</li> </ul>

## ② 乳幼児の発達段階に応じた区分による活動の実施

分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運動面の発達段階に応じた区分による活動では、保護者が子どもの成長を把握しやすいため、職員に気軽に相談する姿が見られた。</li> <li>・2歳児登録活動は、年間を通じて継続した取組が可能であり、季節や発達段階に応じたあそびの提供をすることで、親子が楽しく触れ合う姿が見られた。</li> </ul>
考察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・低月齢（0～2歳）活動のニーズが高く、子育てに不安を感じる保護者への支援や親子が触れ合う場の提供になることから、児童館の利用促進につながる。</li> <li>・運動面の発達段階に応じた区分による活動は、それぞれの子どもに応じたあそびの提供により、子ども自身の心身の発達を促す一助となり、また、保護者が子どもの発達段階を理解しやすく、相談につながりやすいため、子育てへの不安解消が期待できる。</li> <li>・2歳児登録活動を通じて、子どもは集団での力が身につき、保護者は年齢に適した遊びなど、子どもへの理解が深まることから、子育ての楽しさを感じ、負担感の軽減につながることを期待できる。</li> </ul>

## ③ 子育てに不安を感じる保護者への支援や親子の触れ合う場の提供

分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親子交流等団体（旧・母親クラブ）に入会する者が増加しており、コロナ禍での出産及び子育てに孤独を感じたことが入会の理由の一つとなっている。また、活動の中で、年長児の保護者が年少児の保護者のサポートをする姿が見られた。</li> <li>・外部講師を招いた講座では、参加者数が増える傾向がある。</li> <li>・保護者同士の交流に特化した活動では、保護者が交流の場を求めて参加し、初対面の相手とも和気あいあいと話していた。</li> </ul>
考察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親子交流等団体は、幅広い子どもの年代で構成されており、保護者同士の交流を通じて、子育ての楽しさや負担感の軽減につながる。</li> <li>・外部講師を招いた講座では、適切な子育て情報が得られ、子育てへの不安解消につながるとともに、新たな視点での親子の触れ合いにより、子育ての楽しさを感じることにつながる。</li> <li>・交流に特化した活動は、保護者同士が共感できる場となっており、子育ての楽しさや負担感の軽減につながる。</li> <li>・土曜日に開催したことで、父親の参加者の増につながる。</li> <li>・育児休業中の父親の参加が増え、父親同士の交流の場につながっている。</li> </ul>

## イ 子どもの権利を基盤とする健全育成活動

### ① 児童の自主性を尊重したボランティア活動の支援

分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが主体的に取組みたいテーマを話し合い、自由に意見を述べる姿が見られた。</li> <li>・自分たちが学んだ成果を発表する場があることで、地域の方に知ってもらうことができ、活動への意欲につながった。</li> <li>・異なる学年や学校の子どもたちが、一緒にボランティア活動を行う際、高学年がリーダーシップを発揮する姿が見られた。</li> </ul>
考察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちは、取組みたいことを主体的かつ自発的に考え実行し、地域へ貢献することで、達成感を得られる。また、そのことは、子どもたちの自己肯定感の醸成につながる。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちが一緒にボランティア活動を進め、目的を共有する中で、仲間と協調する気持ちを育み、相手を思いやる気持ちや仲間と協力することの大切さへの気づきにつながる。</li> </ul>
--	---

## ② 小学生が主体的に活動内容を選定する活動の実施

分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動内容を自分たちで考える機会を得た子どもたちは、自由に意見を述べ、話し合うなど、主体的かつ自発的に取り組んでいた。</li> <li>・異なる年齢や学校の子子どもたちが、一緒に遊びを楽しめるよう工夫して、活動に取り組む姿が見られた。</li> </ul>
考察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちが自ら活動内容を選定することで、子どもたちの主体性を育むことができ、自身の意見が認められることにより、自己肯定感の醸成につながる。</li> <li>・子どもたちが一緒に活動を楽しめるよう工夫する中で、高学年が低学年を配慮するなどの社会性を育み、相手を思いやる気持ちや仲間と協力することの大切さへの気づきにつながる。</li> <li>・児童厚生員が、子どもたちの自由に意見を述べられることを大切にし、見守ることで、高学年が低学年の意見を引き出すこと姿があり、子どもたちの主体的な活動につながっている。</li> <li>・職員が「子どもの権利」について学ぶことで、活動において、子どもたちが自由に意見を述べられる環境づくりにつながっている。</li> </ul>

## ウ 福祉的な課題への対応

### ① 保健部局との連携による母子保健等の相談支援体制の拡充

分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保健部局との連携を強化する上で、個人情報取扱いが課題となっている。</li> <li>・どこにもつながっていないという安心感から、児童館では素直に自身や子どものことを話す保護者もいる。</li> <li>・発達支援が必要な子どもの来館が増えている傾向があり、職員が自ら研修の機会を求め、療育施設の見学会に参加するなど、発達支援の現状把握につながった。</li> <li>・職員が保健部局の実施している「マタニティサロン」に参加することで、子育てに不安を抱える妊婦の存在を知り、出産前後のフォローの必要性を感じた。</li> </ul>
考察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人情報の取扱いを整理することで、保健部局との連携強化につながる。</li> <li>・相談を目的とせず訪れることができる児童館は、利用者にとって敷居が低く、保護者に寄り添った支援につなげることができる。</li> <li>・相談支援体制の拡充には、子どもやその保護者を理解し、適切な支援につなげることが重要であるため、発達支援に関する研修は有効である。</li> <li>・妊娠期から児童館を知ってもらうことで、出産後、児童館の利用促進につながる。</li> </ul>

### ② 関係機関との連携による子どもの居場所づくり

分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の子ども食堂が行う「食の支援」と連携した児童館の清掃活動の実施により、子どもと地域をつなげる拠点性や地域性といった児童館の役割が見えてきた。</li> <li>・学習支援の実施は、新規の利用者促進や児童館に対する保護者の信頼感や安心感の向上につながったが、教え手側の確保が課題である。</li> </ul>
----	---

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育機関との連携により、増加する不登校の児童・生徒の受け入れ先として、児童館の環境が適していることがわかった。</li> </ul>
考察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちは清掃などの奉仕活動を行うことで児童館を身近な存在と感じ、また、対価を得ることで自身の存在を認められることから、児童館の一員としての帰属意識が生まれ、自身の居場所として認識することにつながる。</li> <li>・子どもたちにとって身近な施設である児童館は、落ち着いた学習環境を整え、教え手を確保し、学習支援を行うことで、子どもの居場所としての機能を強化することができる。</li> <li>・児童館が関係機関と連携を強化することによって、すべての子どもにとっての居場所となる可能性がある。</li> </ul>

## エ 児童館の機能強化を図るための事業として認められるもの（中・高生世代の活動）

### ① 中・高生世代と乳幼児が触れ合う場の提供

分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>・乳幼児とその保護者との触れ合い活動への参加を近隣の中学校・高校に呼びかけたところ、3校から13名の応募があり、昨年に比べて参加者が多いことから、当該活動への興味関心の高さがうかがえた。</li> <li>・図書委員会に所属する高校生読み聞かせを行うことで、児童館の利用者から喜ばれ、活動への意欲につながった。</li> </ul>
考察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中・高生世代と乳幼児が触れ合う場は、保護者との交流にもつながり、また、中・高生が親になるまでに、子育ての楽しさを感じることでできる経験につながることから、子どもを生み育てることや家庭の大切さを理解することが期待できる。</li> <li>・図書委員会の生徒が、自身の得意分野を通じて、乳幼児やその保護者に楽しんでもらうことで、達成感を得ることができる。また、そのことは、生徒の自己肯定感の醸成につながる。</li> </ul>

### ② 中・高生世代のボランティア活動の機会の提供

分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学生にとっては、年の近い「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」と一緒に遊ぶことが楽しい経験となり、活動の継続が望まれていた。</li> <li>・高校生との交流イベントはすぐに定員が埋まり、これを機会に初めて児童館を利用する小学生もいたことから、ニーズの高さがうかがえた。</li> <li>・アンケート結果から、児童館の周知不足や中高生が遊べる施設としての受入整備ができていないなどの課題が見えてきた。</li> </ul>
考察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・乳幼児や小学生から頼られ、感謝される経験の中で、初めは不安を抱えていた中高生が進行していく中で笑顔の姿が見られ、達成感や自己肯定感の醸成につながる。</li> <li>・児童館活動の中で、高校の授業（「総合的な学習・探求」）と連携することで、中高生が児童館を知る機会となり、利用促進につながる。</li> <li>・中学生の中には、ボランティアを通じて乳幼児と関わることの楽しさを知り、地域でのボランティア活動に興味関心を持つ生徒もいたことから、児童館でのボランティア活動の機会の提供は有用である。</li> </ul>